

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：加藤 俊伸

氏名のローマ字表記：Kato Toshinobu

所属：桜美林大学 リベラルアーツ学群 国際協力専攻

専門分野：国際協力

発表のタイトル：モンゴル工学系高等教育における研究室教育支援の効果

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴルの教育分野において、2014年度の11年学制から12年学制(5+4+3)への変更、子ども中心の初等中等教育課程カリキュラムへの改定など、国際スタンダードを意識した改革が進行中である。高等教育においても、1991年の民主化以降、モンゴル国立大学をはじめとする5大学が設立されたもののその後も社会主義時代のソ連の影響は残り、教育と研究の両立、先進国への留学生の拡大、市場ニーズへの対応、専門家の養成、国内外の大学との交流促進などを内容とする教育改革が継続されている。

これらの課題に対応するために、日本政府との協力事業として2014年3月より「モンゴル国工学系高等教育支援事業(MJEED)」が開始された。国際共同教育プログラム(日本の大学との学部ツイニングプログラムやカリキュラム改善の実施)、高等専門学校への留学プログラム、教員育成プログラム(日本の博士・修士課程への留学)、教育・研究用機材整備、本邦・モンゴル両大学間の共同研究の実施・推進をその内容とするものである。この内、後者3つは研究室中心教育(LBT)に焦点を置いている。LBTについては、これまで、タイのモンクット王工科大学、インドネシアスラバヤ工科大学、ベトナムホーチミン市工科大学など東南アジアを中心に日本の協力が行われ、「LBT実践を土台として研究能力が高まった」との報告もある。旧社会主義的な影響の残るモンゴルでLBTが成功するのか。社会的背景により特別な留意点があるのかに発表者は関心を有している。

モンゴルでのMJEEDは現在も実施中で具体的成果を評価するのは時期尚早であるが、現地でのインタビューや論文執筆の分析から、研究レベルの向上等の一定の成果は見込まれ、モンゴルの高等教育の質的向上に資する組織的変革の端緒も見られる。これらのモンゴルでの協力事業の成果は、同様の社会的背景を有する中央アジア各国などが期待する工学系高等教育の改革にも参考となるものである。